Science for Ministry in Japan: The Theory and Practice of Christian Ministry in the Face of Natural Disasters

日本におけるミニストリーのための諸科学

自然災害に直面したキリスト教ミニストリーの理論と実践

Executive Summary

日本的 spirituality の基本は大乗仏教によって性格づけられた。それは日本文化に大いなる benefit と深みをもたらした。ただ、そこには聖と俗の二元論が強くあって、私的（private）な領域でのみ聖を求めて Spiritual development を期待する。しかし公共的（public）領域は俗のままであった。ところが今回の東日本大震災からの救援には、公共的領域での Spiritual development の兆候が見られ、今後の日本でのモデルになる可能性がある。国家神道のようにトップダウンに国家の側からではなく、人々の協力による市民社会と幸福形成にボトムアップに働く spirituality がどのような形を取っていくのか。西洋とは異なる日本的文脈にあるこのテーマを、trans-disciplinary に探究するのが今回プロジェクトの主な目的である。

Strategic Promise

東日本大震災からの復興、原発事故の収束、人口減の低成長時代、高齢化率の高い時代への準備等々が言われてきた。にもかかわら、現代日本で一向に将来的展望が描けない。　この日本列島に住むとはどういうことなのだろう。文化は風土から逃れられない。もちろん筆者は「風土」決定論者ではない。しかし日本列島が温暖な島国などでないことは明らかだ。むしろ事実はその逆であることが判明した。日本列島は、砂漠など比較にならないほどに厳しい風土である。『風土』を著しかつ『日本倫理思想史』の著者の和辻哲郎（1889－1960）が意図したのは6世紀以後の仏教、儒教の伝来以後の温暖な島国の日本思想であったが、実はそれ以上に長いスパンで日本思想の性格は考えられるべきだ。何万年前からか住み着いた先住民たちは、体感的にある倫理観を身に着けたに違いない。

地震、津波は想定外でもなんでもなく、この日本列島が造成されたころからの歴史を持っている。地下で四つのプレートが入り組んでいるような地形は、地球上に日本列島にしか存在していない。このような厳しい自然環境に住みついた先住民たちは、村落を作っては破壊され、また作っては破壊されということを繰り返してきたことであろう。仏教伝来以前から無常観（世は変転するという世界観）を体感として持ったことは確実である。

にもかかわらず、今回、巨大な教訓を学んだはずだ。日本列島では何十年に一度か、何百年に一度か、確実に莫大な地下エネルギーが放出されるのであるから、高度な都市文明の中でその備えをしたライフスタイルを身につけよ、と。特に、原発という極めて人為的でリスクに満ち満ちた技術の事故が、今後ともに逃れがたい地域だ、という教訓である。日本社会は、放射能汚染というこれ以上考えられない「異質な他者」の侵入におびえている社会である。もし「無常観」が「あきらめの哲学」であるとしたら、もはやこのような哲学ではとても生きられない。「温暖な島国」とは正反対の環境の中に生きる確固たる哲学を持たねばならない。禅仏教に基

づく西田幾多郎（1870－1945）の哲学も十分ではない。今、必要なのは、再生可能エネルギーのためのイノベーション（革新）であると同時に、まずは思想のイノベーションである。一言で「規範性」の哲学と言ってよいであろう。それは自然の中にある規範性（自然法則）であり、同時に倫理的な規範性（道徳性）である。このような規範性と omoiyaru 倫理を併せ持つ日本哲学の形成である。

このプロジェクトの目的は、身体的・心理的・社会的・スピリチュアルという世界認識の 4 層を包含する総合的な「ケア学（Care Studies)」を構築し、その成果を実践に応用することにある。プロジェクトは、以下の 3 つのテーマと問いをもって進められる。

①自然神学：神は自然を通してどのように人間をケアしようとしているのか?　なぜ 2011 年 3 月 11 日のような大地震・津波をもたらし過酷な試練を日本人に与えるのか?　自然科学研究からの予知を神学はどう受け止めていくのか？

②ケアの倫理：震災時に見られた日本人と日本社会の抑制された行動に見られる他者を思いやる character は独自の倫理観－ケアの倫理－と言えるのかどうか？人が人を支援することにおける身体的・心理的ケアとしてのリハビリと癒しの問題。Positive psychology の果たす役割は何か？

③キリスト教と地域社会：震災後の社会的なケアとしての町づくりとそこに関わる宗教の公共的役割について。

本プロジェクトでは、上記の問いに対応した以下の 2 つの活動を実施する。

（1）自然科学・医療看護・スピリチュアリティ（理論編）

（2）地域社会の ministry を支えるリーダー・ケアワーカー育成（実践編）

（1）では、研究会（3 つの研究会年 2 回、3 年で 18 回）を行い、（2）では、年 2 回の研究会、中小規模の年 3 回のセミナー、年 2 回のワークショップを開催する。また、年 1 回、3 つの活動に横断的に関わるテーマのシンポジウムを開催する。

本プロジェクトは、以下の成果を生み出す。研究会、セミナー、ワークショップ、シンポジウムの成果は、随時、専用 Website で公開するほか、研究誌として刊行し、プロジェクト終了後には、単行本（印刷･電子書籍）として刊行予定である。また（3）のセミナー、ワークショップは、それ自体がケア・リーダー、ケア・ワーカー養成の場であり、参加者からのフィードバックを受けて、実践的に研究を深化させながらプロジェクトを進める。

静寂主義にあった日本のキリスト教のミニストリーの今後に、2011 年 3 月 11 日の地震・津波・原発事故という大災害を通してもなお「神は自然法則の統御者であり、同時に心の内面に働く道徳の源泉である」というインパクトを与えるであろう。また、日本の社会事業家・賀川豊彦は、日本キリスト教史のなかで例外的に自然神学を深刻に受け止めていた。本研究では賀川の神学を､そのクリスチャン･ソーシャルワークと共に新たなかたちで解釈して提示することで、今後のキリスト教のミニストリーと他宗教との協働の進むべき方向を示したい。